

## ことばと社会に関する最近の動向

### ◆毎日新聞社が2019年3月11日に「やさしい日本語」シンポジウムを開催

- ・『毎日新聞』2019年3月11日「外国人受け入れ巡って「やさしい日本語」シンポジウム」  
<https://mainichi.jp/articles/20190311/k00/00m/040/165000c>
- ・『西日本新聞』2019年3月12日「やさしい日本語の可能性探り議論 都内でシンポ」  
<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/493481/>
- ・『日本語教育情報プラットフォーム』2019年3月12日「毎日新聞が「やさしい日本語」の可能性を考えるシンポジウム開催」 <http://www.nihongoplat.org/2019/03/12/毎日新聞が「やさしい日本語」の可能性を考える>

▲解説：新聞社が「やさしい日本語」のシンポジウムを開催するのは、新しい動きといえる。このシンポジウムは、毎日新聞社、西日本新聞社、日本語教育情報プラットフォームの共催である。

### ▼関連情報：

- ・『毎日新聞』はその後の3月14日に「「やさしい日本語」 外国人にも伝わる表現を」という社説を発表している (<https://mainichi.jp/articles/20190314/ddm/005/070/098000c>)。
- ・『中日新聞』が「やかんちゅうがく 学びの喜びみんなに」という社説をやさしい日本語（ふりがなつき）で発表したのも新しい動きであったといえる (<https://www.chunichi.co.jp/article/column/editorial/CK2019041802000121.html> すでにリンク切れ)。

### ◆日本語教育推進法が制定される

- ・文化庁「日本語教育の推進に関する法律について」  
[http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka\\_gyosei/shokan\\_horei/other/suishin\\_houritsu/](http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/shokan_horei/other/suishin_houritsu/)
- ・文化庁「日本語教育の推進に関する法律の施行について（通知）」2019年6月28日  
[http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka\\_gyosei/shokan\\_horei/other/suishin\\_houritsu/1418260.html](http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/shokan_horei/other/suishin_houritsu/1418260.html)
- ・『西日本新聞』2019年6月21日「日本語教育推進法が成立」 <https://www.nishinippon.co.jp/item/o/520507/>
- ・『ハフポスト』2019年6月21日「新しい法律が日本語教育の「後ろ盾」に。「住む地域に人生が左右されていいのか」現場からは声があがっていた」  
[https://www.huffingtonpost.jp/entry/nihongo-law\\_jp\\_5cddfcefe4b00e035b8d1236](https://www.huffingtonpost.jp/entry/nihongo-law_jp_5cddfcefe4b00e035b8d1236)
- ・『毎日新聞』2019年6月23日社説「日本語教育推進法が成立 実効性のある施策が大事」  
<https://mainichi.jp/articles/20190623/ddm/005/070/029000c>
- ・日本語教育学会「日本語教育の推進に関する法律」成立に関する日本語教育学会の見解  
[http://www.nkg.or.jp/wp/wp-content/uploads/2019/06/20190621\\_pressrelease.pdf](http://www.nkg.or.jp/wp/wp-content/uploads/2019/06/20190621_pressrelease.pdf)
- ・日本語教育学会「「日本語教育の推進に関する法律」成立に関する日本語教育学会の見解」記者会見報告」  
<http://www.nkg.or.jp/wp/wp-content/uploads/2019/07/kishakaiken.pdf>
- ・『ヤフーニュース』田中宝紀（たなか・いき）2019年6月26日「日本語教育推進法成立—日本語支援ない子ども1万人解消に向け、日本教師育成と理解促進が急務に」 <https://news.yahoo.co.jp/byline/tanakaiki/20190626-00131692/>

▲解説：国による言語政策として日本語教育推進法の成立は重大ニュースであった。

## ▼関連情報：

- ・文化庁は「日本語教育コンテンツ共有システム」というウェブサイトを運営している。 <http://www.nihongo-ews.jp>
- ・日本語教育の研究者である田尻英三（たじり・えいぞう）が「ひつじ書房」のウェブサイトで「外国人労働者の受け入れに日本語教育は何ができるか」という連載をしている（<http://www.hituzi.co.jp/hituzigusa/category/rensai/ukeire/>）。田尻はこの連載にかぎらず、言語政策の観点から日本語教育の動向について論点や課題を整理し、問題提起をかさねてきた。

## ◆東京オリンピック・パラリンピック大会（東京2020）のピクトグラムが発表される

『TOKYO 2020』2019年3月12日「東京2020オリンピックスポーツピクトグラムの発表について」  
<https://tokyo2020.org/jp/news/notice/20190312-01.html>

『TOKYO 2020』2019年4月13日「東京2020パラリンピックスポーツピクトグラムの発表について」  
<https://tokyo2020.org/jp/news/notice/20190413-01.html>

▲解説：『共同通信』2019年4月13日「東京パラのピクトグラム発表 20年大会、23種類」の記事によると、

視覚障害者でも触れて認識できるように、ピクトグラムが点字のように立体的に印刷されたポスターを作製し、イベントなどで掲示する。小学生のパラリンピック教育の一環として、ピクトグラムを用いたかるたの制作も予定している。

という（<https://this.kiji.is/489623911391904865>）。ピクトグラムは視覚情報だけでなく、触覚情報としても機能する。

## ◆科研プロジェクトによる識字調査の計画について報道される

- ・国立国語研究所『ことば研究館』「NHK NEWS WEB 「70年ぶりの識字調査実施へ 未就学者や外国籍の増加受け」（野山広 准教授）」 <https://kotobaken.jp/media/news-190701-01/>
- ・『科研費（KAKEN）』「基礎教育を保障する社会の基盤となる日本語リテラシー調査の開発に向けた学際的研究」  
<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-19H00627/>

▲解説：NHKのウェブニュースで6月10日に配信されたが、期間限定記事のため、すでにリンク切れになっている。角知行（すみ・ともゆき）が『識字神話をよみとく』であらかじめしているように、1948年の識字調査では、外国人は除外されていた。今回の調査は、科研費（科学研究費助成事業）による研究プロジェクト（共同研究）であり、うえにあげた「科研費」のウェブページで研究成果が報告される。

## ◆継続する外国人労働者の搾取的状況

- ・『京都新聞』2019年3月4日「基本給6万円で残業時給400円 ベトナム人技能実習生申し立て」  
<https://www.kyoto-np.co.jp/top/article/20190304000102>
- ・『弁護士ドットコムニュース』2019年6月26日「日本を夢のような国だと誘い込まないで」フィリピン人留学生、日本語学校提訴 [https://www.bengo4.com/c\\_5/n\\_9809/](https://www.bengo4.com/c_5/n_9809/)
- ・『ヤフーニュース』2019年7月9日「「廃炉作業に外国人労働者を」の波紋——先送りになった東電計画の底流」  
<https://news.yahoo.co.jp/feature/1376>
- ・『弁護士ドットコムニュース』2019年7月9日「セシルマクビーの実習生問題で報告書 「アパレル業界全体で再発防止に取り組むべき」」 [https://www.bengo4.com/c\\_23/n\\_9864/](https://www.bengo4.com/c_23/n_9864/)

## ◆日本で学ぶ外国人児童生徒をめぐる

- ・『西日本新聞』2019年6月18日「外国人児童の支援強化へ 文科省、不就学児を調査」  
<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/519432/>
- ・『毎日新聞』2019年6月24日「外国人の高校入試に地域間格差 問題ヘルビなど措置実施、約半数の都道府県のみ」  
<https://mainichi.jp/articles/20190624/k00/00m/040/128000c>
- ・文部科学省「外国人の受入れ・共生のための教育推進検討チーム報告書」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/ukeire/1417980.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ukeire/1417980.htm)

▲解説：最近では国が対策をとることが増えてきている。地方自治体におまかせという状態をぬけだしつつある。

## ◆情報バリアフリーをめぐる

- ・『ねとらぼ』2019年6月7日「教材の書体を変えるだけで子どもの読解力が上がった!? モリサワに聞く「フォントのユニバーサルデザイン」」 <https://nlab.itmedia.co.jp/nl/articles/1905/20/news088.html>
- ・『NHK政治マガジン』2019年6月12日「僕は漢字が書けません」  
<https://www.nhk.or.jp/politics/articles/feature/18611.html>
- ・『カレントアウェアネス』2019年6月24日「読書バリアフリー法が成立：視覚障害者等の読書環境整備に関する国・自治体の責務を明記」 <http://current.ndl.go.jp/node/38423>
- ・文部科学省 2019年7月8日「視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する法律の施行について（通知）」 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/ikusei/gakusyushien/1418383.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/gakusyushien/1418383.htm)

## ◆NetflixのSwahili語字幕が話題に

- ・『allAfrica』2019年5月14日「Kenya: Netflix's Swahili Subtitles Has Kenyans Giggling」  
<https://allafrica.com/stories/201905140659.html>

▲解説：「グーグル翻訳よりもひどい」とのことである。グローバル展開しているNetflixは、現地化に力を入れており、日本語字幕、日本語吹替の作品も豊富にある。おなじように、「橋渡し言語」であるSwahili語に対応できれば東アフリカの数カ国に対応できる。すぐに改善されるだろうが、社会言語学的には今後の動向が注目される。

なお、イギリス公共放送のBBCはSwahili語でもニュースを配信しており、この件についても「Netflix: Yajipata mashakani kwa tafsiri mbaya ya maandishi ya Kiswahili katika video zake」という記事で報じている (<https://www.bbc.com/swahili/habari-48283932>)。

## ◆佐々木の「々」の字でシステムエラー

- 『ITメディア ニュース』2019年5月9日「ゆうちょPayアプリで「佐々木」姓が認識されず、アカウント登録できないと話題に 現在は修正済み」 <https://www.itmedia.co.jp/news/articles/1905/09/news090.html>

▲解説：うえの記事によると、

ゆうちょ銀行はITmedia NEWSの取材に対し、「Android版アプリのみで『々』の字が登録できない問題が発生していた。アプリを改修し、Google Playストアに公開したので、Androidアプリユーザーはアップデートしてほしい」と午後1時に回答した。

このように、入力フォームで名前が問題になるケースがある。たとえば、『GIZMODO』2016年3月30日「アメリカ人のNullさん、名前のせいでウェブサイトに登録できない事案が発生」という記事がある (<https://www.gizmodo.jp/2016/03/namednull.html>)。この記事によると、

Jennifer Nullさんが航空券を予約しようとする、ほとんどのサイトでエラーとなってしまいます。彼女は仕方なく電話で予約をし、それは何の問題もなく完了したそうです。

そこで彼女は「なぜ私はサイトが使えないのですか？」と聞いたところ、「申し訳ございません。しかし、どうしようもありません」という回答しかもらえなかったとのこと。

実は「null」というのは、コンピューター用語の1つで、「空の」「何もない」といった意味を持ちます。そのため、Jenniferさんが苗字を入力しても、サイトはそれを未入力だと判断してしまい、正常に処理できなかったとのこと。

という。おなじように、「ンではじまる姓の人」もエラーとなることがある。『NAVERまとめ』2012年4月13日「こういう名前の人は、三菱東京UFJ銀行で口座を作れないらしい リストアップしてみた」が参考になる (<https://matome.naver.jp/odai/2133423040552292701>)。

#### ◆2019年7月21の参議院選挙、山田太郎と山本太郎の票が混同されて集計される

・『毎日新聞』2019年7月23日「山田太郎票515票を山本太郎票に 職員思い込みで富士宮市選管集計ミス」  
<https://mainichi.jp/senkyo/articles/20190723/k00/00m/010/163000c>

・『東京新聞』2019年7月24日「千葉で山本太郎氏の案分票ミス 鴨川市など山田太郎氏と混同」  
<https://www.tokyo-np.co.jp/s/article/2019072401002061.html>

▲解説：これはまさに、手書きで投票し、目視で読みとり集計する日本の投票制度だからこそ発生した問題であるといえる。この点について、つぎのような記事がある。

・『BuzzFeed News』2016年7月20日「投票用紙に名前を書くのは日本だけ？世界のいろんな投票方法」  
<https://www.buzzfeed.com/jp/eimiyamamitsu/voting-system-around-the-world>

・『日本経済新聞』2018年2月9日「各国事情映す投票用紙 候補名「手書き」は例外的」  
<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO26681500Y8A200C1000000/>

・『BBC』2019年4月17日「インドネシア総選挙、読み書きのできない少数民族の思い」  
<https://www.bbc.com/japanese/video-47960504>

・『共同通信』2019年4月18日「電子投票の自治体、姿消す 青森・六戸町、手書きに変更」  
<https://this.kiji.is/491512472944002145?c=39546741839462401>

・『毎日新聞』2019年7月12日「片手不自由でも文字書きやすく 投票救う0.3ミリ 滑り止めシート、神戸の企業が考案」  
<https://mainichi.jp/senkyo/articles/20190712/k00/00m/010/104000c>

・『毎日新聞』2019年7月14日「日本式投票はガラパゴス 他国の主流は「記号式」」  
<https://mainichi.jp/senkyo/articles/20190712/k00/00m/010/149000c>

・『朝日新聞』2019年7月19日「スマホで「ぼちっ」時代、選挙が面倒臭い 遠ざける理由」  
<https://www.asahi.com/articles/ASM7D5R1RM7DUPQJ015.html>

#### ◆言語に関する学会、研究会の開催

・情報保障研究会 2019年7月31日、京都 <https://syakaigengo.wixsite.com/home/zk>

・母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 学会 2019年8月7日、8日、京都 <https://mhbjp/archives/1391>

・「外国語授業実践フォーラム 言語教育におけるインクルージョンを考える―一当事者の声を聴く」2019年8月31日、東京 <https://kokucheese.com/event/index/570932/>

以上のように、ゆれうごく社会のなかで、言語もまた、注目され、議論されている。社会の動向をおさえながら、社会のなかの言語を研究していく必要がある。研究課題は豊富にある。どのような問題意識から、なにを見いだすかである。先行研究をおさえながら、新しい論点をたちあげ、研究成果を世に問うことが多言語社会研究、社会言語学の役割であるといえる。

## 参考文献

- 上西充子（うえにし・みつこ） 2019 『呪いの言葉の解きかた』 晶文社
- 加藤好崇（かとう・よしたか） 編 2019 『「やさしい日本語」で観光客を迎えようーインバウンドの新しい風』 大修館書店
- 川淵一江（かわぶち・かずえ） ほか 2019 『ろう者のがん闘病体験談』 星湖舎
- 近藤ブラウン妃美（こんどう ぶらうん きみ） ほか編 近刊 『親とをつなぐ継承語教育ー日本・外国にルーツを持つ子ども』 くるしお出版
- 牲川波都季（せがわ・はづき） 編 2019 『日本語教育はどこへ向かうのかー移民時代の政策を動かすために』 くるしお出版
- 全日本ろうあ連盟編 2019 『手話言語白書ー多様な言語の共生社会をめざして』 明石書店
- 高田博行（たかだ・ひろゆき）／山下仁（やました・ひとし） 編 2019 『シリーズドイツ語が拓く地平 1 断絶のコミュニケーション』 ひつじ書房
- 瀧田寧（たきた・やすし）／西島佑（にしじま・ゆう） 編 2019 『機械翻訳と未来社会ー言語の壁はなくなるのか』 社会評論社
- 田中牧郎（たなか・まきろう） 編 2019 『シリーズ〈日本語の語彙〉 7 現代の語彙ー男女平等の時代』 朝倉書店
- 野村剛史（のむら・つよし） 2019 『日本語「標準形」の歴史ー話し言葉・書き言葉・表記』 講談社
- 真嶋潤子（まじま・じゅんこ） 編 2019 『母語をなくさない日本語教育は可能かー一定住二世児の二言語能力』 大阪大学出版会
- 吉岡佳子（よしおか・よしこ） 2019 『ろう理容師たちのライフストーリー』 ひつじ書房

## おすすめ映画／ドラマ

- ・『マダム・イン・ニューヨーク』（English Vinglish）
- ・『ピグマリオン』  
ジョージ・バーナード・ショーの原作『ピグマリオン』光文社古典新訳文庫とあわせて。
- ・『わたしは、ダニエル・ブレイク』
- ・『ミセン』韓国ドラマ
- ・『グッド ファイト』アメリカドラマ

## 学生のコメント

障害者の呼称についての問題は言語それ自身の「ものごとの一面を強調する」という性格に基づいていると思う。どうしても言葉は、障害者の障害者たる一面を強調してしまうのだろう。それは言葉自体の「他との差別化」という役割をこなしているために、言語それ自身を責めることはできない。やはり鍵となるのは、その言葉を用いる私たち人間である。どのような言葉が誕生しようとも、それを用いる我々が、理性、倫理によって、それを制限、調整しなければならない。差別語、障害者に対する呼称という問題は言葉を野放しにしてはいけない、ということをお私たちに教えてくれる。「正しい言葉」とは自然には生まれてこない。我々人間が、理性も用いながら、上手に言語を導いていったその先に「正しい言葉」というものが現れてくるのだろうと思う。

【あべのコメント：いま現代つかっていることばにしたって、そのような紆余曲折をへたものです。なにごととも暫定的なものです。つまり、「いま、ここでは、このようである」というだけで、すべて相対的なものです。】

身近なポリティカル・コレクトネスとしては、色えんぴつやクレヨンなどで、「はだいろ」ではなく、「うすだいだい」という表記が多くなったと感じる。私が保育園児だったころ（10～15年前）は、「はだいろ」と言うことが多かったが、最近はほとんど見ない。短期間で大きく変化するのだなと思った。…後略…

-----

…Ms.とMrs.の使い分けの話がでて、思い出したのが、日本における夫婦別姓による議論だ。大学教授の中に最近結婚された女性の教授がいるのだが、彼女は夫の姓ではなく、自らの姓を名のり結婚した。彼女の夫が彼女の姓になったのだ。彼女はその理由について、自分は研究者だから姓を変えるとこれまでの論文などの表記を変えなければならないためめんどくさいからと述べていた。だが、実際の日本社会では依然として結婚して夫の姓を名のることがほとんど当たり前のようになっている。だが、仕事の都合等で、女性の手続きはめんどうなものになってしまう。このような社会を変えていく必要があると私は考える。

【あべのコメント：研究者は名前で勝負しているのです。すでに印刷されている「これまでの論文」の表記を変えることは物理的にできないので、以後の論文で夫の姓を使用すると、同一性が確保できなくなります。夫婦ともに仕事をしても夫はほとんど家事をしないということがかなり多いので、そういうこともふくめて、まともにしていく必要がありますね。】

-----

先生のコメントに英語圏では識字障害の人にとって学習しやすい環境が整備されているとありましたが、実際に英語圏に住むディスレクシアの友人は、識字障害者用の教育はその学習者の知能のレベルに合わない非常に内容の無い事を学ばされていたと言っていました。その為、中には一般の学校に通っているが識字障害の為に留年してしまった知り合いもいると言っていました。その為、識字障害の学習支援は必ずしも学習しやすい環境とは言えないと思います。佐々木蔵之介さんが主演の『チャレンジド』というドラマがあり、彼はろう者の役を演じていますが、チャレンジドという題は単に「挑戦的な人」という意味なのかと思っていましたが、PC表現として“physically challenged”という単語からとったという事が分かり、同時に日本には文字表記から異なるPC表現の「障害者」はないのか疑問に感じた。英語圏のネイティブが、Are you blind? Are you deaf? のように健常者に使う事があり、その差別的要素をニュアンスに含ませる事で他者を侮辱しているのをしばしば耳にしたことがある為、dumbよりも皮肉的で‘offensive’だと思いました。

【あべのコメント：それでも日本よりは学びやすい環境にあると思いますよ。たとえば大学入試のシステムなどを比較しても。相対的な話です。／聴者がろう者の役を演じるのは、なくすべき風習です。大事なのは、当事者を排除しないことです。呼称についての議論にしても同じ。／言語学に意味論と語用論とがあります。語用論では「ことばの意味」を文脈のなかでとらえようとします。deafもblindも当事者も使用するもので、差別表現ではないのですが、例にあげられたような文脈では差別になります。語用論的にいえば、「用語」だけの問題ではなく、その「文脈」も重要です。】

-----

アメリカ英語、イギリス英語においても知的障害者の呼称である ~disabilities (dis 批判的、マイナス的/abilities 能力) のように能力に対して、マイナス的なイメージが浮かぶようなwordが入ってるのが少し気になる。…後略…

【あべのコメント：「slow learners」みたいな表現を見ることもありますが。基本的には「disabilities」は忌避されていません。にた例でいうと、よみかきできないことをむかしは「文盲（もんもう）」といていましたが、現在は「非識字者」といいます。英語でも、「illiterate」から「nonliterate」に変わりました。すくなくとも、識字研究 (Literacy Studies) で「illiterate」ということはありません。】

-----

日本は多民族国家ではないので、人種による差別用語はあまりありませんが…後略…

【あべのコメント：敗戦後の日本では「混血児」が社会問題になりました。当時の言論を確認すると、ひどいものがありますよ。『「混血児」の戦後史』が参考になります。サイニーで「混血児」で検索するだけでも、時代の雰囲気わかります。】

-----

差別語は非常にたくさんあって、現代の日本ではそれを減らしていこうとしているが、新しい言葉が登場する度に、その言葉は誰かを傷つけてしまうかもしれない可能性を持っている。言葉は必ず受けとる側に立って話さなければいけないと思う。

【あべのコメント：問題は、日常のコミュニケーションの場に「受けとる側」がいないこともよくあるということですね。「なんとかが一」といっているとき、その場にはその対象はいない。たとえばSNSは公開されている分だけ、いろんな人の目にとまるわけです。だからこそ、ふだんのコミュニケーションよりも問題化される機会がふえる。】

-----

日本の政治家でも時に、女性差別的な発言をして、批判の対象になることがあります。ただ、発言に対しては厳しくひはんされているのに、そういった差別に対する政策などが進んでいないことに対しては、メディアも含めて批判が少ないように感じてしまいます。

【あべのコメント：「見える化」ということがポイントとしてあると思います。すでに常態化している構造的差別というのは風景になってしまっているので、あらためて問題化することがでてこない。差別発言は、発言者が自分で旧態依然とした認識を自分で暴露することで「見える化」するので、批判されやすい。なので、研究者などがデータや国際比較などをおして構造的な問題を指摘したりもするわけです。】

フランス語学習を始めたときに、女性名詞・男性名詞があることにおどろきました。これを性差別だと捉えるのは、現時点ではマイノリティかもしれませんが、このような議論があるからこそ言語は今までも変化してきたんだなあと思います。

『リトル・マーメイド』という映画の主人公に黒人のハリー・ベイリーが選ばれた。これに対してアメリカでは大論争が起こっている。twitterでは #NotMyAriel というハッシュタグが作られたり、オンラインで反対の署名運動も起こった。これに対して黒人の人たちはブラックマーメイドの絵を描いたり、黒人男性がアリエルの格好をして「オーディションをうけるんだ！」と動画をアップしたりと、アンチの人たちに対してユーモアで返している。

言葉のうけつぎについて考えました。私の母は「知恵おくれ」という言葉を今も使い、そのことを悪いとは思っていません。私も母の影響で、中学生のころまで使っていました。このように、人を傷つける言葉を当然の言葉として深く考えず使用している人はたくさんいて、また、その人に影響された家族などもさらに何も考えず使用する、そんなことが世界中であるのだらうと思います。そのうけつぎをとめるのは、教育だと思います。

中高生のころ、おかしい行動をする、ふざけている人間に対して「アスペ」「害児」とからかう人たちをよく見ました。もとはネットスラングだったのかもしれませんが。それを見たり聞いたりするたびに、そのやりとりをしている人たちは知的障害者＝おかしい人と思っているのか、と不安になりました。まわりには思っていないくても、そういう考えがすりこまれてしまうのではとこわくなりました。←歌の歌詞の話で思い出しました。

昔、小学校で身体障がい者、いわゆる“しんしょう”と友達とふざけて呼びあっていました。今思うととんでもないことを言っていました。バンクーバーやオックスフォード大学で、er（彼）she（彼女）ではない中立的な言葉、“xe”や“Ze”の使用を推奨しようとする動きが最近あったようです。

【あべのコメント：新語よりもtheyのような、もとからある語の用法をかえたほうがいいじゃないとか、当面はいろんな議論がでると思います。そうして10年、20年したあとに、定着する表現がでてくる場合もあるでしょう。】

ポリティカルコレクトネスはディズニー映画でも考慮されているときいたことがあります。これは、人を傷付けないためにある程度は気にしなければならない部分もありますが、映画作品などに対しては、創造の制限につながりかねないかなと感じます。ディズニー映画が原作をもとにする場合、ポリティカルコレクトネスの観点を気にしすぎることで、本来の作品とは少し違った話が世の中で認識される、ということになるなら、ポリティカル・コレクトネス制限はなされるべきではないと考えました。

【あべのコメント：ハリウッドでどれだけ「日本人」「アジア人」が侮蔑されてきたかという歴史も見てほしいと思います。有名な映画『ティファニーで朝食を』でも、白人男性が日本人役で、こっけいな役を演じていますが、ああいうのはやっぱり時代の限界というべきものです。その時代、その社会のなかに作品はあるので、芸術だったら倫理は関係ないということにはなりません。科学も同様です。手をつかわないからこそサッカーがおもしろくなるように、そのときの制限のなかで「作品」はつくられています。予算だとか、技術だとか、倫理だとか、いろんな条件のなかで。】

ネイティブの先生の英語の授業の中で、女優のことを“actress”と言ったら、先生からその表現はもう古いと言われました。今では女優と男優を区別せず“actor”と言うのが一般的になってきているそうです。また、老人のことを“old”と表現した先生が、少し考えた後で“elderly”と言い直すこともありました。日本語と同じように、どの言語でも、時代に合わせて言葉に対する話者の意識が変化しているのを感じました。

パラリンピックアスリートの対談をTVで観たことがあります。一方は「障害者」なんてもってのほかだと主張していましたが、もう一方のアスリートはそこにこだわる必要を感じないと話していました。これを観た時、誰も漢字うんぬんにこだわっているのではないのだなあ…と思いました。「害」という表記に隠れた差別意識に、人々が目を向けているか否かを問題にすべきだ、と。…中略…表記や呼称を巡って差別やマイノリティーについて考えていけばいい、という理解をしました。

【あべのコメント：障害学では障害の社会モデルというとらえかたをします。障害の個人モデル的な視点では、「個人に障害がある」というふうにとらえる。けれども、障害というのは、社会、環境にあるんだというのが障害の社会モデルです。この視点を共有している人は、障害者という呼称・表記を問題視しない傾向があります。けれども一方で、障害者という表記はいやだという人もいます。障がい者という表記をいやだという障害者もいます。】

…1つの言葉に対してポリティカル・コレクトネスと言っていると言葉の多様性が失われると思う。重要なのは発言した人が悪意をこめて言ったかそうでないかという点ではないだろうか。

【あべのコメント：セクハラと同じで、悪意の有無だけで判断するものではないと思います。「きょうもキレイだねえ」などと職場で発言するのは、悪意がなくてもセクハラです。多様だったらそれでいいというものではない。】

…セクシュアルマイノリティーについて研究していますが、ニュースやTwitterのコメントを読んでいると、PCの行き過ぎといったようなコメントは多々あります。そして、発言することが批判を恐れることによって難しくなっていることは今のSNSの時代では大きな問題であると思います。しかし批判を恐れずに行動するものが、いつの日かの“普通”を作るためには必要だと思います。私はそのような人間になりたいです。

…「ガイジン」という言い方について思い浮かびました。何の気なしに使っている人もいれば、「それは差別的だから外国人の方がよい。」とリプライする人をtwitterやYouTubeのコメント欄でよく見かけます。…後略…

【あべのコメント：外人という表現については、わたしが学部生のころから留学生は「イヤだ」といっていました。いまだに使用されつづけていることが残念です。とても排他的な表現。】

アメリカのコメディ番組で、アジア人の体形や背の小ささなどの冗談を言って笑いをとっているのを見たことがある。そのときアイルランド人も見ていたのだが、みんな楽しそうに笑っていた。それを見て少し悲しかった記憶がある。でも、彼らは本当に悪気のない様子で笑っていたので、どんなことが人種差別になり、人を傷つけるかは、冗談の対象になる人以外には、わかりづらいうらなうなと感じた。表現の自由として認められる範囲ならいいと思うが、それ以上の冗談はさけるべきかも…でもその“範囲”がどこなのかが難しい…

## 「多言語社会研究」後期（金曜5限）の予定

<http://hituzinosanpo.sakura.ne.jp/tagengo2019b/>

第1回 多言語主義について／授業ガイダンス

第2回 『日本語学級の子どもたち—引揚げの子どもが会おう〈日本〉』（1983年）をよむ

第3回 言語的少数者にとっての学校

第4回 言語を学ぶということ

第5回 災害がうつしだす言語問題

第6回 ことばを矯正するということ

第7回 ことばと優生思想

第8回 ことばと性規範

第9回 ことばをクイアする

第10回 制度化された識字の問題

第11回 識字のユニバーサルデザイン？

第12回 ピクトグラムでみんなに通じる？

第13回 情報技術による多言語化と均質化

第14回 復権と解放のための言語権 第15回 まとめ